

陳 立行 (チン リッコウ)

中国出身／1989年度奨学生

筑波大学 社会科学研究科社会学専攻 博士課程修了

外国人奨学生2期生であり、関西学院大学で教鞭を執られている陳立行さんに、
激動の政治情勢のなか勉学に励まれた人生についてご寄稿いただきました。



「人生設計」という言葉を好む人は少なくないかもしれませんが、66年間の人生を振り返ると、両親からも、自分自身も、設計された通りのことは一つもありませんでした。

1968年、15歳の時、「知識青年上山下郷運動」により農村に下放され、辛い農作業に加え、政治的差別（父は国民党の技術官僚）にも耐えねばなりません。幸い下放先では優しい人が多く、私に生き抜く力を与えてくれました。絶望に襲われたとき、父の「今の社会は永遠ではないだろう」という言葉は希望になり、毎日5つの英単語を覚えることを自分との約束としました。

1977年の冬、中国で11年間中断された大学入試が再開されました。しかし父が「歴史反革命」であったため、政治審査に通りませんでした。半年後1978年7月、政治審査が完全に解除され、東北師範大学外国語学科の英語専攻に合格しました。入学後、授業の他、文学部、教育学部、政治学部、歴史学部、数学部と方々へ聴講に走り、具体的な目標はありませんでしたが、ただただ知識に飢えた日々を送りました。

1982年、中国政府は海外の大学院へ国費留学生を派遣する政策を採り始め、その試験に合格し、英語専攻のためアメリカ留学を志望しましたが、日本派遣となりました。来日当時、日本語の講義は全く分からず、先生と英語でコミュニケーションを取り、大学図書館で英語の

社会学の書籍を猛勉強しました。その時、博士課程修了後中国に帰り、中国の社会学再建に貢献するという「人生設計」をしました。

ところが、博士課程4年の1989年6月、歴史的な大事件がおきました。中国政府の博士課程に対する3年間の奨学金が終了したところでした。私は36歳で、1949年、国民政府の技術官僚で、台湾に行かずに大陸に残ったときの父と同年齢でした。父は1952年まで東北鉄道局の技術責任者として働かされました。「歴史反革命」とされ糾弾されましたが「新しい中国鉄道の復興に貢献した」として監獄には入れられなかったものの、公安局の監視下に置かれました。父は仕事を失い、家族は政治的・経済的苦境に陥りました。「今の社会は永遠ではないだろう」という言葉は1978年の改革開放により漸く実現されました。その時、父は今の私と同じ66歳になっていました。

博士課程修了後中国に帰り、中国の社会学の再建に貢献する「人生設計」をした私はあの事件を見て、中国はどの方向へ転換しているのかとても不安に陥りました。当時社会学の博士学位を取得することはとても難しく、日本人の先輩方はほぼ全員単位終了で就職しました。中国に帰らず、日本で大学に就職しようとすれば、「外国人、女性、35歳以上、育児中(娘が2歳)」と4つのハンディキャップがあると先生に言われました。私が入学したとき筑波大学社会科学研究科の教員は全員男性で、1988年初めて1人の独身女性教員が採用された状況でした。博士論文を完成することには意味がまだあるの

か、36歳にして大きな迷いの中にありました。15歳で農村に下放されたとき、度々絶望的な気持ちに陥りましたが、生き抜くため頑張らねばならず、迷う気持ちはありませんでした。ところがこの時は、結婚し主人は日本の企業での研修中で「国に帰らないのであればそのまま入社してください」と言われており、2歳の娘もいることから、博士論文を諦めようと思いつつも、諦めきれない毎日でした。私は本当に人生の迷子になりました。その際、筑波大学から坂口財団の奨学金への応募を勧められ、坂口財団の奨学生になりました。坂口理事長にお会いし、理事長の視野、社会に対する責任、奨学生に対する温かい期待は強い電流のように私を感動させました。女性がこれほどの会社を営むにはすべて順調な状況にあるわけがなく、私たちが知らない困難な状況を乗り越えたからこそ、奨学財団の設立まで辿ってこられたのだろうと感じました。もし何かの不況や困難の状況に諦めていたら、今日の財団はあり得なかったことでしょう。理事長から手渡された奨学金の封筒と同時に、その優しさと強い信念は、私を混乱と不安から完全に解放してくれました。全力で博士論文の執筆に集中し、理事長の温かい期待を裏切るまいと決めました。

1990年3月筑波大学で社会学博士学位を取得し、総代として学長から学位記を受け取った際、指導教授の駒井洋先生の涙は今でも忘れられません。私は日本で社会学博士学位を取得した中国大陸出身者の第一号となりました。1年後、国際連合地域開発センター（UNCRD）に研究員として就職し、4年間働きました。その後、日本の大学で教鞭をとり、今日まで教育と学術研究の現場でがむしゃらに努めてきました。理事長との出会いにより、日本社会での4つのハンディキャップに立ち向かう勇気ももらいました。理事長の時代はもっと女性に厳しい社会だったと思います。強い信念と実力があれば日本社会にも認めてもらえるという強い

証として、理事長から日本社会で頑張っていく希望をいただきました。

大学院時代から日中社会学会の活動に参加し、初代会長の福武直先生は、中国の社会学の再建に大きく貢献され、1980年代に学会を発足されました。それほど偉い先生でありながら平等な討論、批判を通じて大学院生の私たちを育てて下さったことに感銘を受けました。2000年代、日中社会学会は250人以上の学会に成長しました。私は学会理事や編集委員長を経て、2011年日中社会学会の会長に選出され拝命いたしました。懇親会では著名な社会学者の袖井孝子先生から「女性、かつ外国人が日本の学会の会長に選ばれたのは日本の学術界の発展のマイルストーンになります」と感激の祝賀を頂きました。会長職を退いた現在も、日本と中国の若い社会学研究者を育てるために学会活動を継続しています。

後半生を日本で過ごすとは夢にも思いませんでした。2人の子供は共に日本に生まれ、彼らは日本国籍を選択しました。現在娘は国家公務員で、息子は京都大学医学部の学生です。主人は、一緒に筑波大学に来た中国人留学生で、昨年大学教員を定年退職しました。

坂口財団と出会い、人生の迷子になったときの道しるべとなり、理事長から頑張る希望をもらい、温かい期待は私の行動力の源になりました。人生100年の時代と言われています。これからも健康を維持しながら、自分を育てた中国と日本の社会に恩返しを続けていきたいと思っています。かの名曲にもありますよう「地図さえない、それもまた人生」。歴史的な大事件がなければ、坂口財団と出会うこと、日本で後半生を過ごすことは恐らくなかったでしょう。設計した人生ではありませんでしたが、これまでの充実した日々感謝の気持ちでいっぱい溢れています。ありがとうございました。代表理事ご夫婦のご健康とご多幸と共に、財団の益々のご発展を心からお祈り致します。